第十回　「ウクライナ抑留者慰霊」

岡部　芳彦

ウクライナ南東部の最大の都市ドネツクから車で 2 時間程のドゥルジュコフカ（Дружковка）という街に、第二次大戦後ソビエト連邦によって多くの日本人が抑留されたと聞いてからずっと訪問して慰霊したいと思っていました。今回、ウクライナの皆さんのご助力も得て実現しました。

「すべての戦没者のため」
という慰霊碑の前で合掌。

歴史を専門とする者としてお恥ずかしいかぎりですが、ウクライナに多数の日本人が抑留されていたことを以前は知りませんでした。ソビエト連邦の指導者ヨシフ・スターリンの命令により満州（現在の中国東北部）にいた多くの日本軍人がロシアのシベリアに抑留されたことは知られていますが、中央アジアやウクライナにも連行され劇場や道路建設、炭鉱労働などに従事させられました。詳しい人数はまだ確定していませんが、ウクライナには最大で五千人から一万人あまりが連れてこられ、八百人ぐらいがお亡くなりになったとの説もあります。

今回の訪問にご協力いただいたウクライナ
の皆さんも一緒にお参りしてくれました。

2010 年夏にウクライナのキエフを訪問した際、国境警備隊博物館を公式に訪れた初めての日本人ということで、退役軍人と博物館の共催でセレモニーがあり、所蔵品のウクライナ抑留者の遺品だという旗を突然返還されビックリしました。日本代表でもない僕が受け取っていいものかと思いましたが、退役軍人の皆さんと博物館側の希望が一番だと思いお聞きしたところ「日本の兵士の聖堂（靖国神社のこと）に還してくれ」とのこと。靖国神社については賛否もありますが、ウクライナ側のたっての希望ということもあり、ひとまずお預かりして日本へ持ち帰り、直接神社の社務所に電話してみました。ただ、なぜ日本代表でもない僕が旗を受け取ったかなど事情が複雑な上に説明不足で話がどうもかみ合いません。普段あまり信心深くなく神社関係とコネもないため、扱いに困っていたところ、安倍晋三元首相（現首相）が間に入ってくださり、ウクライナ側とも再度ご相談し、2011 年にお焚上げ（供養のため燃やすこと）していただくことになりました。神社にお納めする当日に安倍元首相に旗の実物をお見せしに伺いました。「遠いところをよく還ってきてくれた」と感慨深げに旗をご覧でした。

抑留者の遺品といわれる旗を手に
安倍晋三氏のオフィスにて。

線香とお酒をお供えしました。

第二次大戦中のウクライナでは、ソ連側と独立運動側に分かれて戦うことになりました。独立運動に身を投じたウクライナ人は戦後日本人抑留者と同じ収容所に収容されたこともあったそうです。そのせいか、ウクライナでの日本人抑留者は比較的恵まれた待遇であったと言われています。現地の女性と結婚し、ウクライナ人になった方もおられます。

今では年に２回ほどウクライナを訪問しますが、ロシアをまたいで日本の隣の隣の国とはいえ、距離的には近くはありません。ソ連によって強制労働に従事させられ日本に帰ることがついに果たせなかった日本人の皆さんは戦争と抑圧的政治の犠牲者であり、その望郷の念を考えると涙せずにはいられませんでした。妻が用意してくれた線香と数珠を携え「すべての戦没者のため」の慰霊碑に着くと、誰が供えたのでしょうか、美しいお花が手向けられていました。地元の方にお聞きすると、近くにお住まいのウクライナの方が誰彼となくお花を置いて行かれ、絶えることはないとのことです。

ラーゲリ(収容所)があったという場所はいまは集合住宅が建っていました。

慰霊碑訪問が終わると、ドゥルジュコフカ市「インテレクト」・ギムナジウム（11 年生学校）を訪れました。今回の訪問はこの学校の校長先生もご助力くださいました。地方都市に住む生徒さん達の心温まる歓迎・パフォーマンスに日本とウクライナの友好の未来を見た気がしました。

僕も先の大戦では祖父を空襲で亡くしました。抑留者の身内ではありませんが、一人の日本人として慰霊させていただいたことで、遠くウクライナでお亡くなりになった方々の霊魂が少しでも安らかになることを願いつつ、また今回の訪問と慰霊の実現にご助力いただいたウクライナの皆さんに心から感謝しつつドゥルジュコフカの街を後にしました。

ウクライナの伝統的衣装。

生徒さん達のパフォーマンス。左の女生徒さんは日本語の歌を歌ってくれました。女学生さんのグループのパフォーマンスはさながらウクライナ版AKB48といったところでしょうか･･･

副市長さんや教育関係者もご参加でした。